

## 5. 今月のトピックス「チャの輪斑病について」

### 1. 生態と被害

輪斑病は炭疽病とともに茶の重要な病害の一つです。糸状菌の仲間であり、分生子が摘採、整せん枝、すそ刈などにより生じた茶葉の傷口から侵入することにより感染し、発病します(図1)。



図1 輪斑病の分生子(左)と新梢枯死症(右)

病斑の特徴は炭疽病が単調な茶褐色の病斑であるのに対して輪斑病では茶褐色の同心円状の病斑が発生します。

潜伏期間は5~7日と短く、気温が高くなる5月中旬頃から感染が始まり、気温が高いほど発病程度は著しくなります。二茶摘採後に降雨と高温が続くとから秋にかけて発生が多くなります。また、この時期の秋番茶の新梢に感染すると「新梢枯死症」の発生源になることもあります(図2)。

「やぶきた」、「さやまみどり」、「おくみどり」、「さえみどり」は、発病しやすい品種とされています。



図2 輪斑病葉(左:茶業研究室原図)と新梢枯死症の初期症状(右)

### 2. 防除

耕種的防除として夏期高温期の摘採、整せん枝を避けて、茎葉に傷口をつくらないようにしましょう。

農薬による防除は、摘採または整せん枝直後(当日)に防除することが重要です。周辺茶園の収穫を待って防除しましょう。

他県では QoI(ストロビルリン系)剤耐性菌の発生が報告されていますので、年1回使用に止めましょう。

新梢枯死症対策として、輪斑病の防除(二番茶の整せん枝直後の薬剤防除)と三番茶芽の二葉開葉期の薬剤散布を組み合わせると効果的です。

農薬はラベルを確認して正しく使用してください。